



「がん」は遺伝するのか？

乳腺・甲状腺外科 科長 高島 大典

癌の発症原因は？

よく患者さんから「なぜ私は癌になったのか？」という質問を受けます。

癌の発症原因は人それぞれ異なるため一言で答えることは難しいですが、一番大きな原因のひとつは加齢です。

癌は一般的に高齢になるほど発症しやすくなります。今まで何も病気になったことがないのになぜこんな歳になって癌なんてと嘆く方がおられますが、こんな高齢になったからこそ癌を発症したと考えることができます。

次に大きな原因として挙げられるものは生活習慣などの環境要因です。タバコを多く吸う人は吸わない人より肺癌をはじめとした様々な癌にかかるリスクが高いことは常識ですし、自分が吸わなくとも受動喫煙により発癌のリスクは上がります。また不摂生な食生活や肥満、運動不足なども特定の癌の発症リスクを上げることはほぼ確実とされています。ほぼ9割くらいの癌はこうした加齢や生活習慣が原因と考えられます。

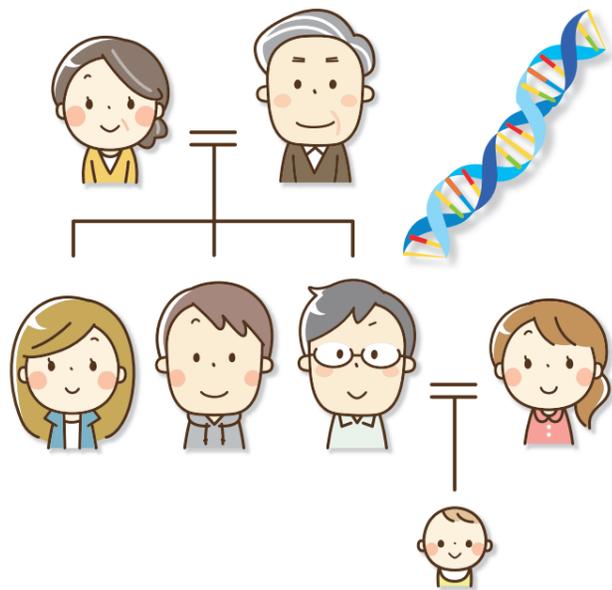
ところが環境要因だけではなく生まれ持った体質(遺伝的要因)が原因で癌にかかりやすいという方がいます。

癌発症者全体の1割ほどはこうした遺伝的要因で癌を発症していると考えられています。このように遺伝的要因が発症に大きく関与している腫瘍のことを遺伝性腫瘍と言います。

遺伝性腫瘍を疑う要因は？

遺伝性腫瘍の特徴は若年発症、多発性、反復性、家系内集積性などが挙げられます。

10代や20代で癌になったり(若年発症)、同じ臓器に同時に癌が多発したり(多発性)、時期をずらして複数の癌に何度もかかったり(反復性)、また癌にかかった方が血縁者に何人かいるといった場合は遺伝的要因が関与しているかもしれません。



遺伝性腫瘍とは？

遺伝性腫瘍の患者さんは癌の発症にかかわる特定の遺伝子変異を生まれた時点ですでに持っているため、一般の方より若い年齢で癌になったり、何度も癌になったりすることがあります。

つまり生まれ持った遺伝子変異が癌の発症原因といえます。この遺伝子変異の多くは両親いずれかから受け継いでいることが多く、さらに子供の世代に50%の確率で伝わります。また兄弟をはじめ、血縁者間で同じ変異を共有している可能性があります。

誤解のないように追記すると肺癌、乳癌、大腸癌といった癌自体が遺伝するわけではなく、癌になりやすいという体質が遺伝するという事です。そのため癌の発症リスクは高いですが、100%発症するわけではなく、生涯癌を発症しない方もいます。

遺伝性腫瘍の診断は？

遺伝性腫瘍の確定診断には患者さんの血液を採取し特定の遺伝子に変異があるかどうかを調べる遺伝子検査が必要です。変異が疑われる遺伝子を一度に調べる遺伝子パネル検査もありますが、多くは保険適応外で自費での検査となります。

また遺伝子変異が見つかった場合、血縁者、子供も同じ変異を受け継いでいる可能性があるため血縁者にも同じ遺伝子検査を行う場合があります。

遺伝性腫瘍の患者さんに対する対応

遺伝子検査で遺伝性腫瘍の確定診断がついた方は、発癌リスクが高いということになります。この遺伝子変異は生まれ持ったものなので、この体質自体を変えることはできません。そのため対策としてリスクに応じた検診や予防的手術が勧められます。こうした手段をとることにより、少しでも早期に癌を発見し、治療することができるようになります。

自分が癌になりやすいという事実を突きつけられることは衝撃かもしれません。しかしリスクを知らなかったばかりに検診や対策をなおざりにし、癌で命を落とすという事態はなんとしても避けたいところです。

自分のリスクを知るということは長い目で見るとメリットの方が大きいと考えられます。

このように遺伝性腫瘍の確定診断、その後の対策には専門的知識を持った担当医や遺伝カウンセラーなどによる適切なアドバイスを受けることが望ましいと考えられます。

当院では毎月、隔週で遺伝性腫瘍に対する相談外来を設置しています。

上記の遺伝性腫瘍を疑う条件に当てはまる方や遺伝のことが気になるという方はいつでもご相談ください。



看護指導室
Nursing Consultation